

メロンの花

農研機構 野菜花き研究部門
育種・ゲノム研究領域
川頭 洋一

日本においてメロンは主要な野菜の一つであり、2017年の産出額は645億円である。販売されているメロンの果実は多様性に富んでおり、果皮にネットのある品種、ネットの無い品種、果肉が緑色の品種、オレンジ色の品種、白色の品種、高級なマスクメロンなど、様々なタイプのメロンが流通している。主要産地としては茨城県、北海道、熊本県、静岡県が挙げられる。

メロン (*Cucumis melo* L.) はウリ科キュウリ属の植物で、原産はインドと考えられている。日本に渡ってきたのは縄文～弥生時代とされ、東洋系のマクワウリやシロウリが栽培されていた。西洋系のメロンが渡来したのは明治時代で、当初は一般消費者には手がでない高級品だった。戦後に経済成長が始まり、安価なメロン品種「プリンスメロン」や「アンデスメロン」など新しい品種が開発されたことにより、メロンの大衆化が進んだ。

メロン栽培において、確実に果実を得るためには、ハチを使って交配したり、植物成長調整剤を散布して着果・果実肥大を促進させる必要がある。メロン栽培において利用できる植物成長調整剤として、トマトーン（有効成分：0.15% パラクロロフェノキシ酢酸）、エルゴール乳剤（有効成分：1% エチクロゼート）、アークランド液剤（有効成分：0.2%

1-ナフタレン酢酸ナトリウム）が挙げられる。果実を得るためには、果実になるための花を咲かせる必要があるが、メロンの花には雄花と雌花以外に「両性花」と呼ばれる花もある。雄花は、黄色い花卉の内側に、花粉を作る葯がある（図-1）。雌花は、花卉の内側に、花粉が付くための柱頭があり、葯は無い（図-2）。雌花は、花の下部に子房があり膨らんでいるため、容易に雄花と区別することができる。両性花は、雌花と同様に柱頭と子房があり、さらに葯もある（図-3）。両性花の葯は、柱頭の周りに3～4箇所程度に分散して形成される。

メロン品種の多くは、1つの株に雄花と両性花を付けるタイプだが、1つの株に雄花と雌花を付けるタイプ（単性花性）の品種もある。その例がF₁品種「フェーリア」（農研機構育成）で、この品種は単性花性と短側枝性という特徴を持っていて、省力栽培が可能な品種である。単性花性であるため、両性花で起きやすい自然着果が少なく、余分な果実の摘果作業が軽減される。また短側枝性により、発生する側枝の多くが途中で自然に伸長を止めることから、短い側枝を除去せずに放任することができ、整枝作業時間を5割程度短縮できる。

メロンの中には単為結果性（受粉しなくても果実をつける）を持つものが存在しており、農研機構では単為結果性メロン



図-1 メロンの雄花



図-2 メロンの雌花

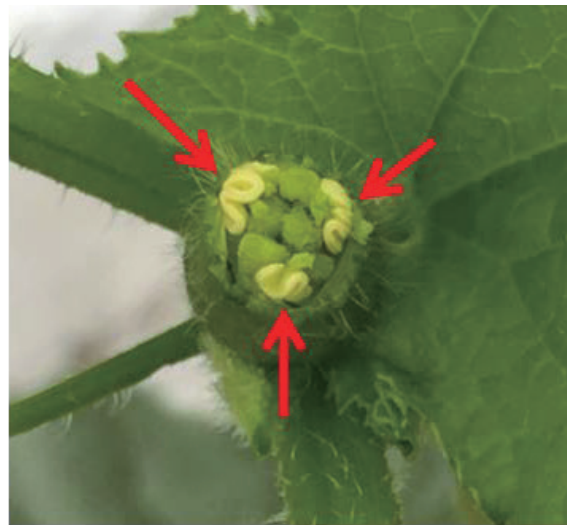


図-3 メロンの両性花
右の写真は花弁を除いたもので、矢印は葯の部分指着している。

の育種にも取り組んでいる。ハチが飛ばなかったり花粉が出にくい低温期の栽培では、手交配や植物成長調整剤処理が必要だが、単為結果性メロン品種が育成されれば、それらの作業が不要となり省力・低コスト生産が期待できる。

メロンの産地では、うどんこ病やつる割病に加えて、最近

ではタバココナジラミで媒介される退緑黄化病やミナミキイロアザミウマで媒介される黄化えそ病も問題となっている。そのためメロンの安定生産のためには、これらの病害に対する抵抗性品種の開発も重要である。